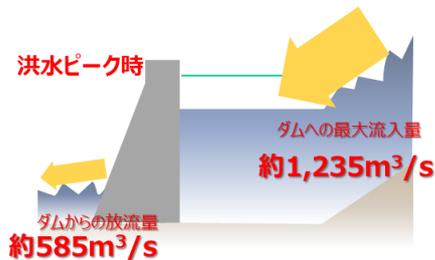


Q9. 令和2年7月豪雨において、市房ダムからの放流が洪水被害を大きくしたのではないのでしょうか。

- ダムによる洪水調節は、「氾濫発生リスクの低減（ピーク水位の低減）」、「避難時間の確保」、「（上流ダム地点で貯留することによる）氾濫箇所での氾濫被害の軽減」の3つの効果があります。
- 令和2年7月豪雨時において、市房ダムでは、大雨となる前日の7月3日15時から7月4日2時頃まで予備放流を実施し、事前にダムの水位を低下させたことにより、洪水調節容量約190万m<sup>3</sup>を追加して、合計1,620万m<sup>3</sup>を確保して洪水調節を行いました。
- その結果、洪水を約1,230万m<sup>3</sup>貯留して最大流入量（約1,235m<sup>3</sup>/s）に対してダム下流部への流量を半分以下（約585m<sup>3</sup>/s）に低減するなど機能を発揮しました。

洪水ピーク時の市房ダムの洪水調節



令和2年7月豪雨時の市房ダムの貯留の状況

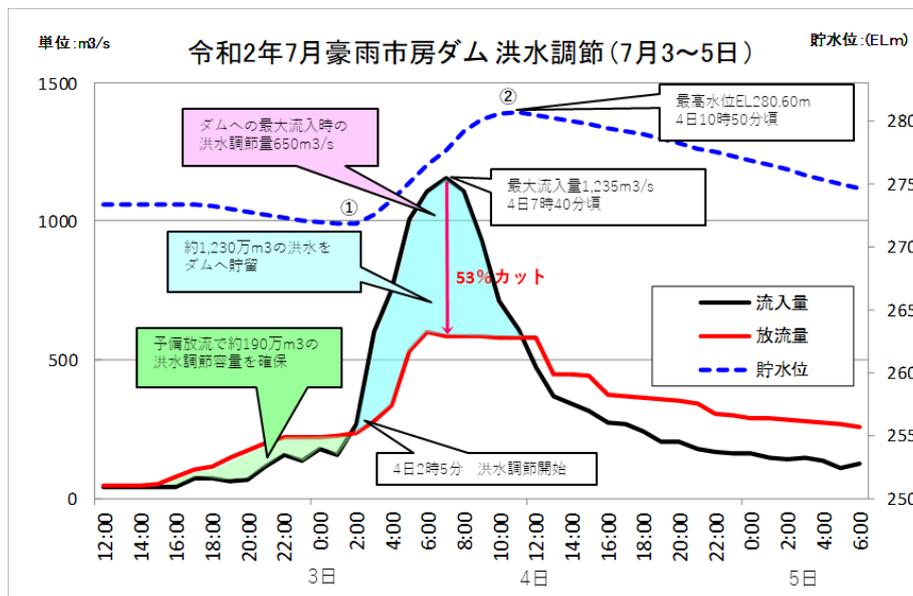


図 令和2年7月豪雨時の市房ダムの洪水調節

- これにより、人吉ではピーク時の水位を約 40 cm、多良木では約 90 cm 低下させたと考えられることから、市房ダムからの放流により洪水被害を大きくしたのではありません。

人吉市街部・人吉大橋付近の横断図

多良木水位観測所の横断図

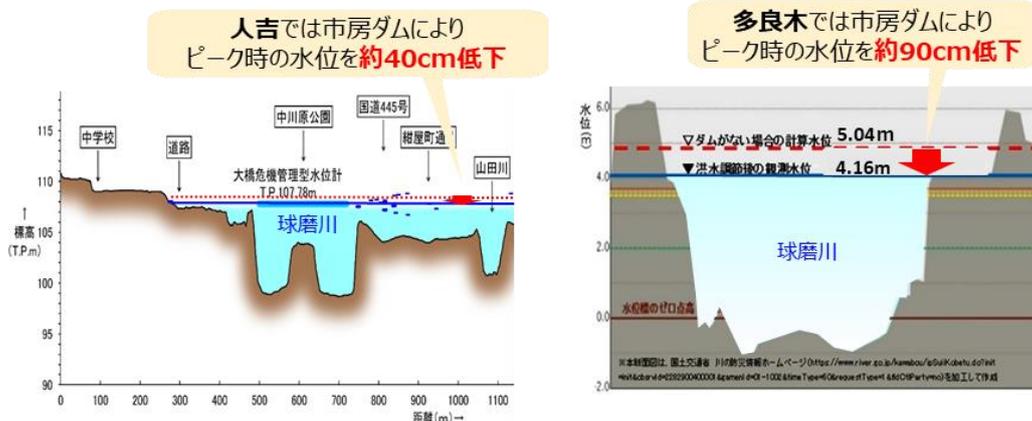
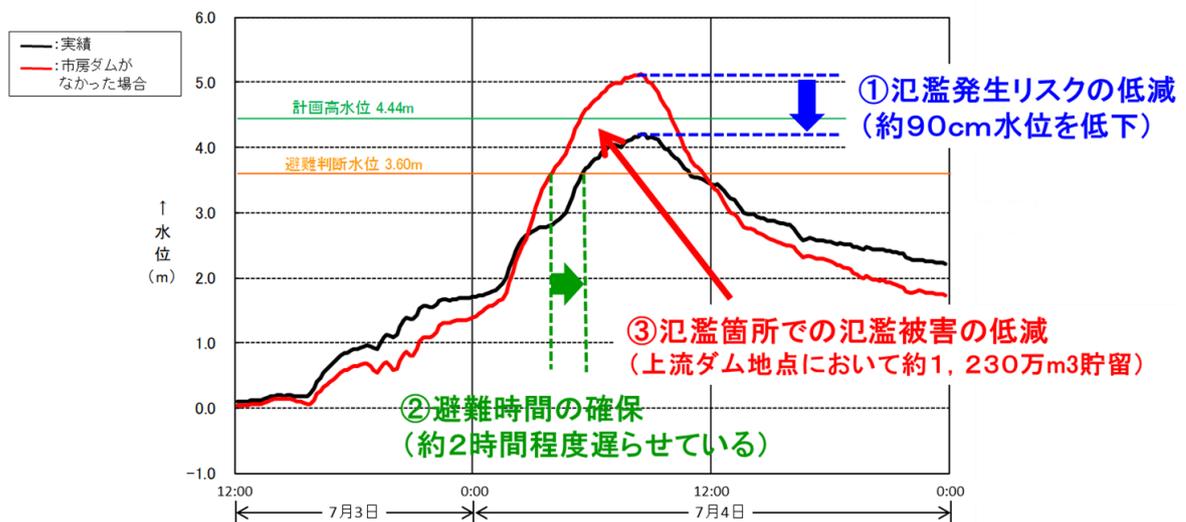


図 令和2年7月豪雨時の市房ダムによる水位低減効果

- また、市房ダムの洪水調節により、多良木地点において避難判断水位に達するまでの時間を約 2 時間遅らせて、避難時間を確保できたとともに、ダム地点で約 1,230 万 m<sup>3</sup> 貯留したことで氾濫箇所での氾濫被害の軽減が図られたと考えられます。



調節効果(多良木地点)

※本資料の数値は「速報値」であり、今後変更の可能性がある。

図 令和2年7月豪雨時の多良木地点の水位(市房ダムの効果)

- 令和2年豪雨時の市房ダムの洪水調節について、ご確認したい方は[こちら](#)をご覧ください。

- なお、令和 2 年豪雨時の市房ダムの洪水調節を含む令和 2 年 7 月豪雨の検証については、国土交通省八代河川国道事務所のホームページに[「第 1 回令和 2 年 7 月球磨川豪雨検証委員会」](#)に掲載しています。